

日時 平成 29 年 5 月 26 日（金）10：30～16：30
テーマ アセスメント活用事例 ～WISC-IV～
講師 臨床心理士 大六一志氏



今年度初めての SSC 公開講座を京都府スーパーサポートセンターで開催しました。昨年度に引き続き、臨床心理士の大六一志先生による WISC-IV の講座で、小中高等学校、特別支援学校より多くの申込があり、58 名が受講しました。

講義ではまず WISC-IV の得点の意味について触れられ、評価点は絶対値ではなく、個人内の有意差を見るためにある、と確認されました。また、CHC 理論を基にする現在の WISC-IV では、社会性や情報処理過程、メタ認知などは測定できないこと、聴覚処理や長期記憶、読み書きも測定できないものだと述べられました。特に、読み書きの課題は授業で見つけるものだ、という言葉が印象的でした。また 2014 年にアメリカで出版された WISC-V についても少し触れられました。

また CPI 指標に関連した「熟達」の重要性について、毎日長期間にわたって取り組み、体で覚えて自動的に動くようになるまで繰り返すことが大切と述べられました。発達障害児は定型発達児と同じトレーニングを繰り返しても熟達は期待できず努力を強いるだけなので、発達障害に特化した課題をすること、イヤイヤやっても効果が上がらないので、楽しい課題で意欲が続くよう配慮する必要があると強調されました。また鍛えた記憶は主体的に活用しないと定着しないということも例を挙げておっしゃっていました。

後半では報告書の書き方について学びました。報告書は WISC の検査の解説ではなく、主訴の原因とその対応方法を伝えるためにあります。報告書は長々と書かず専門用語は日常の言葉に置き換えること、WISC の結果は省略してもよいが主訴の原因は省略してはいけないこと、問題の本質を記載すること、年齢や発達に適した指導方針を書くことが大切と述べられました。また本人や保護者へのフィードバックの際には、伝えるよりも聞くことが大切で、結果や提案した対応方法への感想を相手から聞くことで、結果への不安や不満を解消できるというお話は、日々の児童生徒や保護者との関係作りにおいても全く同じことが言えると感じました。適切な支援が受けられるタイミングを逃さないように、決断のタイミングを伝えることや、本人が明日から頑張ろうと思えるような報告書になっていることが大切だということも学びました。



＜参加者アンケートより感想＞（一部抜粋）

- ・検査報告を返す際に、再度主訴の確認をしたり、本人や保護者に合わせたわかりやすい形でのフィードバックをしたりするなど、きめ細やかな対応が必要だということを知った。
- ・自校にいる子どもが浮かんできた。教えてもらった対応を試してみようと思った。
- ・各指標得点と日常の課題や実態をつなげていくことが大切だと分かった。これからの指導に活かしたい。
- ・保護者にとって意味のある報告ができるよう、報告の際には「保護者から聞くこと」も大切にしたい。

6 月の公開講座は、6 月 26 日（月）に「見えにくい子どもたちの生活・学習面の困り感について知ろう」をテーマに京都府総合教育センター北部研修所で行います。京都府視覚支援センター、SSC 視覚支援担当による地域の園や学校で学ぶ見えにくさのある子どもたちの理解講座です。